

もくじ 若き東武鉄道社員の徴用と出征 1P 鹿浜での子どもの生活③ 2P  
綾瀬川関係の古写真2点 3P ミニ展示「記憶になったお化け煙突」4P

# 足立史談

第559号

2014年9月15日

足立区教育委員会  
足立史談編集局

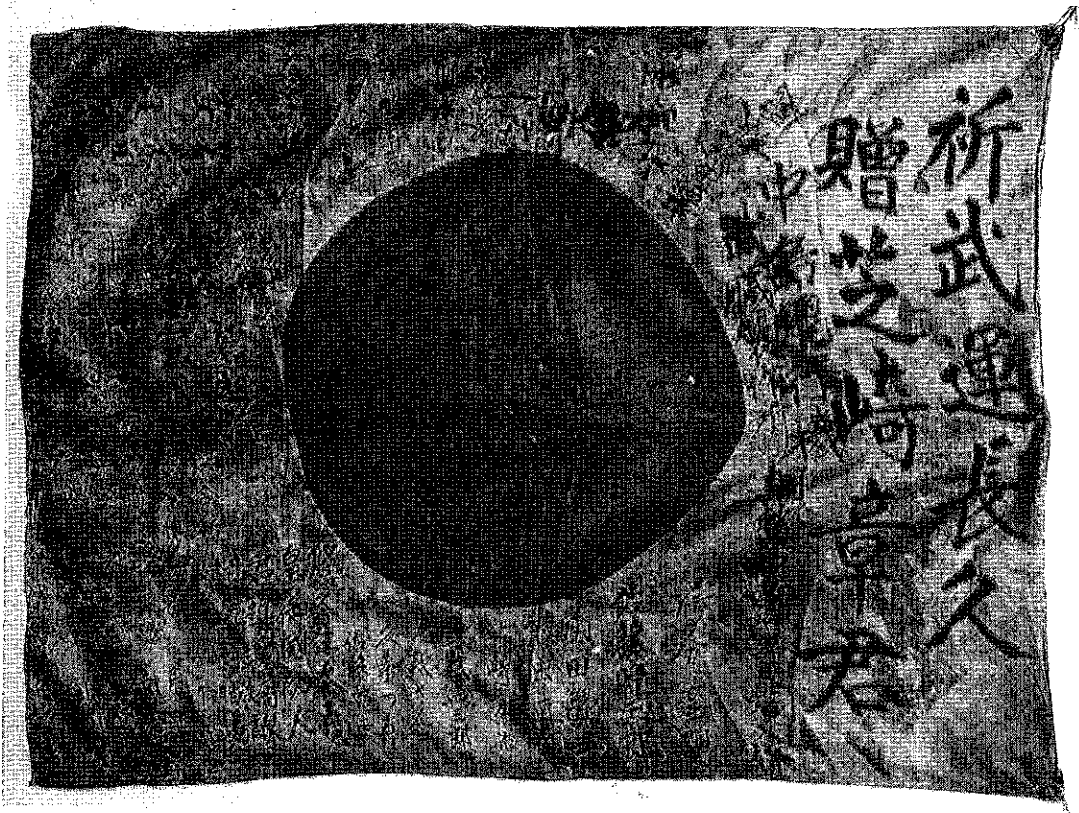
足立区立郷土博物館内  
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL.03-3620-9393

FAX.03-5697-6562

〈25-308〉



昭和19(1944)年 足立区梅田町の芝崎章氏が出征に際して贈られた寄書日章旗。

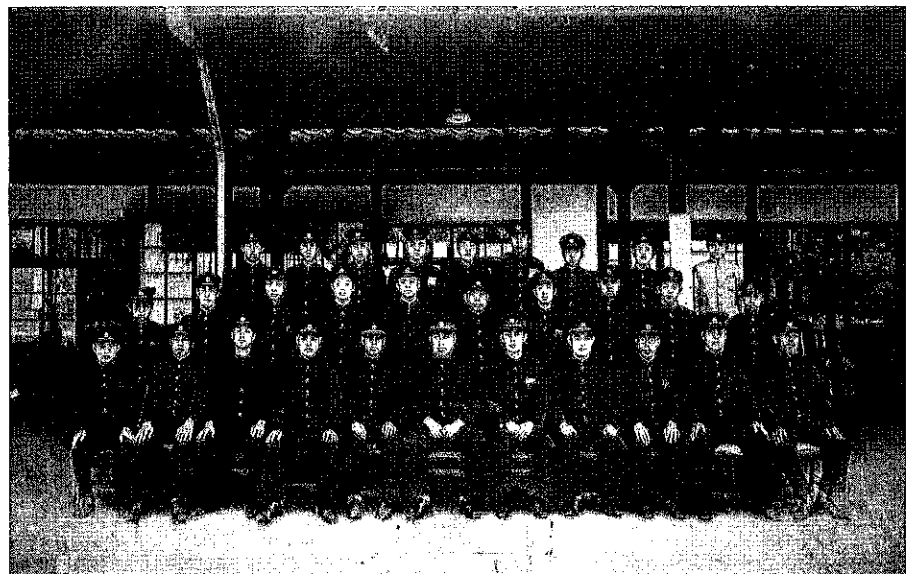
## 新収蔵の戦時中資料

### 若き東武鉄道社員の徴用と出征

足立区梅田町にお住まい  
だった芝崎章さん(大正十  
三・一九二四年生まれ。現  
在、野田市上花輪新町在住)  
は、ながく東武鉄道に勤め  
た鉄道マン  
でした。こ  
のたび郷土  
博物館に戦  
中・戦後の  
貴重な資料  
を多数御寄  
贈になりました。今回  
からいくつ  
かの資料を  
ご紹介して  
いきます。

同資料群  
の貴重性は、  
戦時下の社  
会で就職、  
徴用、出征  
空襲、復員  
の各段階そ  
れぞれの関連資料が、  
断片的ではなく揃っ  
ていることです。足立区梅田の芝崎  
家を通じて戦時下の社会を学ぶこと  
が出来ます。

■東武鉄道への入社 芝崎さんは梅島  
小学校から、足立第二高等小学校(現  
足立区立第四中学校)に進み、昭和



東武鉄道川越市駅の社員  
昭和十五(一九四〇)年撮影 芝崎章氏蔵

十四(一九三九)年三月に卒業しま  
した。その年の十二月に東武鉄道に  
運輸課講習生として入社しました。  
翌昭和十五(一九四〇)年三月には  
川越市駅手となりました。(右写真)  
そして同年八月には本社運輸部調  
査掛となり東武鉄道の社員として歩  
み始めていました。



徴用された芝崎さんを東武鉄道は休職扱いとし、いつでも復職できるようにしていました。左写真は徴用された当時の芝崎さんです。若い鉄道会社社員が徴用工となった姿です。

■出征と日章旗 その後、昭和十九(一九四四)年十二月、今度は徴兵が芝崎さんを待っていました。

前頁の写真はそのとき芝崎さんに贈られた寄書日章旗です。

中島飛行機の職場の人、親戚、家族、学校の先生、梅田町の近所の方など多くの署名もありました。日章旗には大きく「中島飛行機 武蔵製作所調質職場第三焼入係」と記されています。ほかに東武鉄道から贈られた日章旗もあり合わせて寄贈されました。

\* \* \*

■中島飛行機への徴用 そうした中、三年後の昭和十八(一九四三)年二月、軍用機を製造していた中島飛行機多摩製作所への徴用が決まりました。この頃、中島飛行機では武蔵野製作所と多摩製作所という二つの工場が壁一つを隔て隣接していました。芝崎さんは、そのうちの多摩製作所に入りました。同じ年、二つの製作所は統合され武蔵製作所となりました。当時の給料袋や腕章なども保存され寄贈されました(右写真)。



出征と梅田町を襲った空襲に関する資料等、今後、紙幅の都合により不定期でご紹介していきます。(郷土博物館)

縁故疎開です(した北鹿浜町の想い出②)

### 鹿浜での子どもの生活 その3

小川 誠一郎

■はだして過ごす 島の子供らの水遊びの紹介です。夏は天氣が良ければいつも近くの水辺へ出た。一緒に連れ立って行くのは、なぜか仲間の一部の常連に限られた。ほかの友が暑い盛りをどう過ごしたのか、とくべつ誘われることもなかったのを知らない。記すまでもないが、この辺の活発な子供は外で遊ぶ際、寒くて足袋が欲しくなるまで、ほとんど裸足が普通だった。実際、身軽な裸足のおかげで、気ままに畑を横断でき、また田んぼや流れにどしどし入って行けるので、心が一つになつて気のおけない遊びグループがつくられた。不慣れた土地へ遠出する時は下駄を履くので、鼻緒が切れたらどうしようかと、かえって余計な心配事が増える。砂利と碎石と泥で固められた村道は、裸足の足裏にきつく当たり初めは痛くて難儀した。しか

しすぐ慣れるもので、知らぬ間に平気で駆け回れるようになっていた。そして裸足ゆえに、蛇の出そうな深い草むらや踏み抜きそうな竹藪、さらには、薄く油の浮き出た池の端やあやしげな湿地にぶつかると、野性的な足裏の感覚が呼び醒まされるのか、危険を察知する勘を鋭くさせ、身を守ることができた。

■水遊びの場所 真夏でも家の近くの島堀にバシャバシャ踏み入って遊ぶことはなかった。淡い緑白色の流れは底に何があるかを見せず、足はずりりともぐつて底泥が舞う。仲間達は親に止められていたのかもしれない。そうだとすれば、嬉々として目指した水遊び場は、許しを得たところだったのだろう。半裸姿のセツちゃん、アツさん、ジンちゃん達と一緒にいく一番近いところは、皿沼から横土手に沿って勢いよく流れ下る用水堀。荒川堤にぶつかり大きく左へ折れ、堤の脇を東へ向かう辺りだ。高橋茶屋へ上る急坂のすぐ下の大きな石橋の脇を、左へ三〇メートル程行くと、そこへ島堀から分かれた支流が消え入るように合流している。普段ほとんど流れはないが、大雨の時、島堀の水量が増すと出番が掛かるのだろう。かたわらに子供達がたむろできる小さなスペースもあった。この用水堀は遠く離れた靴屋地域へ堤沿いに直接送水する役割を



遊び場となった用水の流れ 昭和22年の空中写真に加筆

担っていた。水量豊かな速い流れは冷たく澄み、深さは子供の腰のあたり、川幅が広く、底は小石まじりの細かな砂利で水遊びに適していた。体が冷えてくると、枯れかかった島堀の支流に入り、温もった軟らかい泥底に腹ばいになって、体を滑らせ浅い流れを行ったり来たりして過ごすのだった。水辺に茂った背の高い草に隠されたか細い浅瀬は、自分一人の至福の場だ。敏感になった体表面の感触を頼りに、目を閉じ手探りにして動き回り、楽しさを体中で受

けとめた。ときにお腹の辺でエビガニの子供がごそごそしたり、驚いた蛙が目の前に飛び出したりして付き合ってくれた。

■共同溜めの甲羅干し 帰りは気が向くと共同溜めの熱くなったコンクリの屋根に上がって甲羅干しをした。6畳間を二つくらい並べた広さ、すぐ真下に溜めがあることなど気にならない。下肥は発酵が充分進んで生々しさが消え表面は厚いかさぶた状に盛り上がり、枯れた匂いは、周囲の空気に馴染んでいる。暑い夏の盛りが過ぎて涼しくなった秋の夕暮れなど、陽光からもらった優しい温もりを残すコンクリ屋根は心地よい。身体をじかにゆだねると、やんわりと癒される。空気が濃いブルーに変るまで腕を一杯に振り回し、ベゴマ擦りに熱中した。冬が近づくと、それまで溜めの回りを囲んでいた身の丈ほどの雑草が枯れ敷き、隠れていたコンクリ側壁が姿を現す。荒涼たる情景に鳥が集まって来て、夏の楽しい

盛りが過ぎて涼しくなった秋の夕暮れなど、陽光からもらった優しい温もりを残すコンクリ屋根は心地よい。身体をじかにゆだねると、やんわりと癒される。空気が濃いブルーに変るまで腕を一杯に振り回し、ベゴマ擦りに熱中した。冬が近づくと、それまで溜めの回りを囲んでいた身の丈ほどの雑草が枯れ敷き、隠れていたコンクリ側壁が姿を現す。荒涼たる情景に鳥が集まって来て、夏の楽しい

思い出を追い払ってしまう。子供達はまだ目をやることもなく通り過ぎる。(慶応義塾大学名誉教授)

古写真の撮影場所をさぐる

綾瀬川関係の古写真2点

鈴木恒雄

『足立風土記』、『ブックレット足立風土記』などの印刷物に掲載されている古写真の撮影場所について、当時の1万分の1地形図の判読、現場での聞き取り、私の記憶などから、その場所を改めて二か所、特定したので報告する。

綾瀬一丁目氷川神社か」と表題がつけられている。しかし、人物が特定でき、花畑の下沼から対岸の浮塚の氷川神社を撮影したものであることがわかった。写真右側の茅葺屋根のお宅が浮塚の篠木宅であることも判明した。(撮影は昭和三〇年代初期と推定) 次頁の地図も参照されたい。

■小谷野橋付近の写真の場合 次頁の写真2は、『ブックレット足立風

■花畑の写真の場合 写真1は、下肥船の係留として、

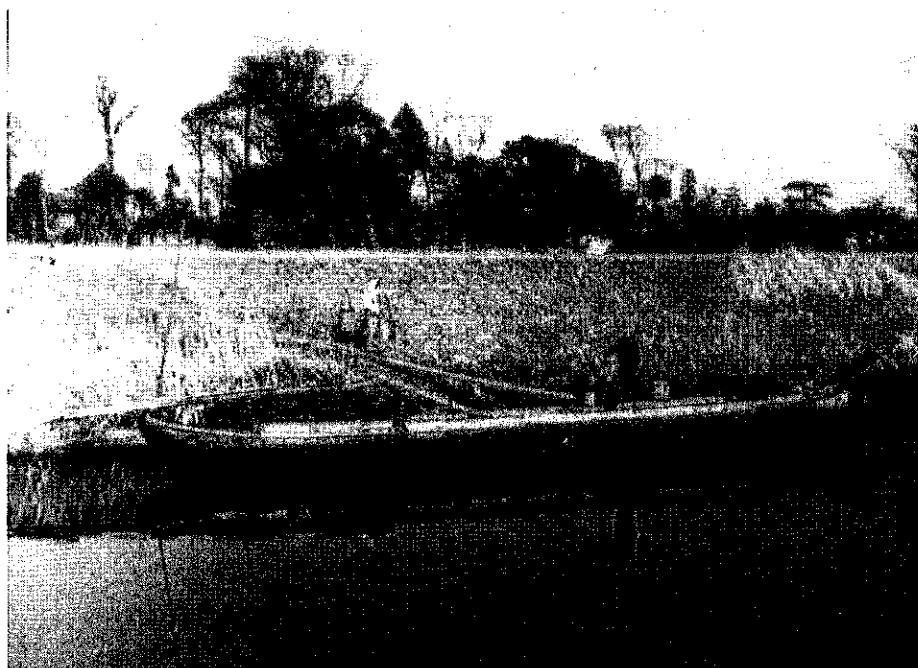
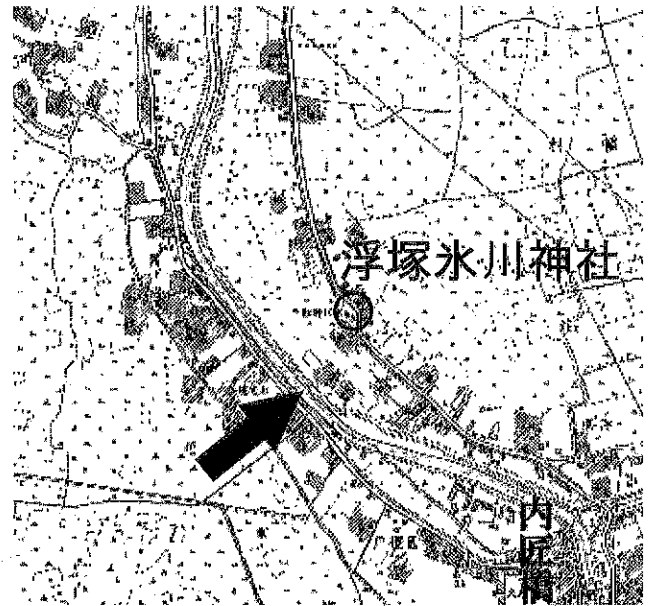
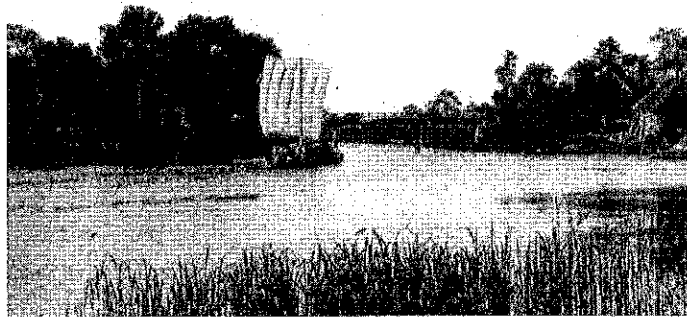


写真1 綾瀬川 浮塚氷川神社(現 八潮市浮塚450)裏の河岸 『足立風土記稿 地区編6 綾瀬』より

土記「千住地区」に掲載されたものであり、当初、綾瀬橋下流付近から撮影されたものとの記載がある。しかし、今回、当時の地形図の判読から、綾瀬橋の下流には該当する場所がなく、小谷野橋下流にその該当箇所を見つけたのである。一番大きな写真上の特徴は、綾瀬川左岸の堤防外側に造船所のような建物があることである。綾瀬橋の下流側にはこの様な建物はない。全体の景観も小谷野橋下流によく合っている。

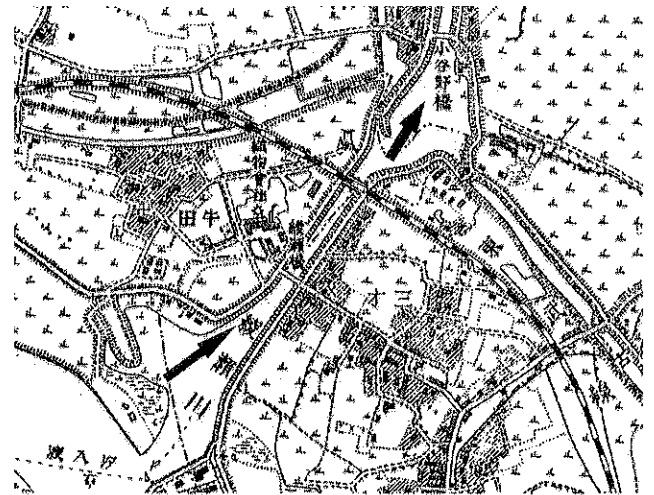


綾瀬川 浮塚氷川神社裏の河岸  
陸地測量部 1万分1 昭和12(1937)年



【上】写真2 綾瀬川帰帆の図(『ブックレット足立風土記 千住地区』より) 小谷野橋下流から橋方向の撮影と推定(明治30年代後半)

【右下】綾瀬川河口綾瀬橋と小谷野橋付近  
陸地測量部 1万分1 明治42(1909)年



今回の場合でも正確な位置がわかることによって、その船はどの方向にむかっているのか? どのようなものを積載し、どんなものを積み下ろしているのか? その積荷は何か? その場所はその当時の川のどの辺にあたるのか? 河岸を研究するにあたって重要な情報になった。数

少ない古絵画や古写真は、当時の相対の情報を我々に提供してくれるものである。古写真の位置の特定には、言い伝えや推定ではなく、現地での聞き取りや地形図での確認が必要である。さまざまな研究の基礎作業として非常に重要なものであり、今後も続けていきたい。

(博友会)

足立区立郷土博物館 / 平成26年度ミニ展示

記憶になったお化け煙突 解体50年 9/21(日)~10/5(日)

足立区のシンボルだったお化け煙突。千住火力発電所は昭和38(1963)年に操業停止となり翌39(1964)年に解体されました。今年、50年の節目を迎え、あらためてその姿に迫ります。

【新収蔵資料公開】 発電所平面図、厚生施設案内ほか

●記念講演会「お化け煙突のせかい・その構造と仕組み」

10月4日(土) 10:30~12:00 / 会場・博物館講堂(申込不要)  
講師: 格和宏典氏(元千住火力発電所所員)

